

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【宮前小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	児童は自身の課題に対して「学び方が適切であったか」、「うまくいったのか、そうでないのか」という観点で学習を振り返ることができるようになってきたが、どの教科においても、時間の経過で内容を忘れてしまっていることや既習事項が十分に定着していなかったことが見受けられた。課題を達成するために自分の学習能力は満足できるのか、達成できない際のような力が足りないのか振り返り、必要に応じて知識や技能を補っていく(復習していく)という学び方を習得させる必要がある。	
思考・判断・表現	実際、児童の読書量は増えていない。学校評価の結果の分析から、家庭での読書時間の確保について、積極的に働きかける必要がある。算数の図形に関する問題に課題が見られるので、ICTの活用や教具を使っての実際の作図など多角的にアプローチする機会を作っていく。「学びのつながり」を意識して、自分の考えを広げ深められる児童を育成するために、教科横断的な視点を意識するとともに、これまで実践してきた「個別最適な学び」の観点並びに「協働的な学び」の観点を取り入れた授業実践の深化を図る。	

今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「言葉の特徴や使い方」 算数「数と計算」「変化と関係」 <指導上の課題> 個人差が大きいため、個に応じた指導が必要。自身の課題を理解するための振り返りが不十分。	漢字は辞書を活用しながら、普段から文章の中で使う【毎時間】。主語述語の関係は、ドリルパーク等で定期的に練習するようにする【月に1～2回】。既習事項を振り返りながら、これまでの学習内容と関連付ける意識を高める【毎時間】。自身の課題を振り返り、課題を達成するための学習方法について考える機会をもたせる【単元ごと】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「書くこと」「読むこと」(記述) 算数「図形」「数と計算」 <指導上の課題> 文章のつながりを意識してまとめさせたり、式との関わりを説明させたりする機会が不十分。	業前の読書活動や図書室の活用時間を十分に確保する【週に1回】。「個別最適な学びの観点」並びに、「協働的な学び」の観点を取り入れた授業を実践し、自分の考えを整理して説明する機会を増やす【単元ごと】。ICTを効果的に活用し、視覚的に図形等の構造を理解させ、「わかった、できた、楽しい」を引き出す【随時】。

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	新出漢字の練習は丁寧にしている。タブレットを使用することで、変換して漢字使用する頻度は増えているが、実際に書く機会が減少している。主語述語の関係については、今後も意図的に授業の中で取り上げ、ドリルパーク等で定期的に練習させる必要がある。特に算数では、教室に「算数コーナー」を設置することも含め、既習事項を振り返りながら、本時の内容と関連付けられた指導を行った。児童は自身の課題に対して「学び方が適切であったか」、「うまくいったのか、そうでないのか」という観点で学習を振り返ることができるようになってきた。
思考・判断・表現	B	文章のまとまりを意識して読んだり書いたりする力に課題が見られたため、業前の読書活動や図書室の活用時間を十分に確保するようにした。図書館のイベントも季節ごとに行った。学校課題研修の研究主題として「個別最適な学び」の観点並びに「協働的な学び」の観点を取り入れた授業実践を推進し、自分の考えを整理して説明する機会を増やした。対話的な活動の有用性を自覚している児童が増えた。学習用タブレットやプロジェクターを効果的に活用し、視覚的に図形等の構造を理解させ、「わかった、できた、楽しい」を引き出すことができた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、課題であった言葉の特徴や使い方に関する問題において、やや向上が見られたが、無回答率が高く、習熟度に個人差がある。また、情報の扱いに関する問題では、情報を図に表した場合の関連付けを適切に整理することにも課題が見られた。算数では、データの活用に関する問題で、全国平均に比べて大きく上回る結果であった。一方で、図形の判別やはかりの目盛りを読み取る場面で正答率が低く、基礎的な知識・技能の定着を図る必要がある。理科では、磁石につくか、電気を通すかという身の回りの金属の性質について、知識の定着が十分ではなかった。	
思考・判断・表現	国語の「書くこと」では、内容の概要をとらえ、文章と図表を結びつける問題において、条件を満たした記述ができ、正答率も全国平均を上回った。他の記述式の問題でも、無回答率が低く粘り強く取り組むことができた。算数では、全国平均と比較して正答率の幅が大きい問題が多かった。「図形」の面積を求めるときは、基本図形の面積の求め方が十分に定着していないようだった。複合図形や図形の向きにも対応できるよう様々な問題に触れる必要があると考える。ほとんどの問題で、無回答率が低かったのはよい傾向。理科では、「地球」を柱とする領域で、特に正答率が高かった。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	令和7年度さいたま市学習状況調査の「知識・技能」において、令和6年度の自校の結果と比較し、国語で3.2ポイント、算数で0.6ポイント、社会で1.1.8ポイント、理科で4.2ポイントそれぞれ低下した。国語については、特に既習の漢字の問題や、主語と述語の関係及び修飾関係の問題に課題が見られた。算数については、特に小数や分数の混合した計算や公式を使った図形の問題に課題が見られた。社会については、市の平均も大きく低下しているが、特に方位や国土の位置関係の問題に課題が見られた。理科については、特に電気や磁石の問題に課題が見られた。どの教科においても、時間の経過で内容を忘れてしまっていることや既習事項が十分に定着していなかったことが要因と考察される。	
思考・判断・表現	令和7年度さいたま市学習状況調査の「思考・判断・表現」において、令和6年度の自校の結果と比較し、国語で3.6ポイント、社会で1.5ポイント、理科で0.4ポイントそれぞれ向上した。一方、算数は5.3ポイント低下した。国語については、目的を意識して文章を読み取る問題では良い結果が見られた。算数については、作図や角の大きさ面積の求め方等特に図形に関する問題に課題が見られた。社会については、大きな偏りはないが土地利用についての問題に課題が見られた。理科についても社会との関連で方位についての問題で課題が見られた。どの教科においても、偏った課題は見受けられず、粘り強く考え解答していた。基本的な知識・技能の習得が向上すれば、「思考・判断・表現」の結果にも良い影響があると考察される。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	漢字については、高学年児童は自分で学習の計画を立てて取り組んでいる。国語以外でも文章を書く際には既習漢字を積極的に使うよう指導している。ドリルパーク等を活用し、児童自身が課題と考える学習内容の復習に取り組むようにしているが、自主学習としては取組に個人差が大きい。	継続して実施していく。漢字は、新出漢字の練習だけでなく、熟語や同音異義語、反意語なども意識的に練習するよう指導し、文章を書く機会に、積極的に使うようさせていく。
思考・判断・表現	B	図書室の活用や、業前の読書タイムを推進しているが、家庭も含め、1日の読書量が十分確保されているとは言えない。学校全体で「個別最適な学びの観点」並びに、「協働的な学び」の観点を取り入れた授業の実践を積極的に推進している。対話的な学びの時間は確保されているが、自分の考えを自信をもって整理して説明できる力は、十分ついているとは言えない。	継続して実施していく。全国学力・学習状況調査でも、「図形」に関する問題で課題があったことから、ICT機器を使っての空間認識を高めることと併せて、実際に作図してみたり、複合図形の面積を求めたりする学習に取り組む。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)